

# 槐

かい

平成29年9月号

岡井省二創刊



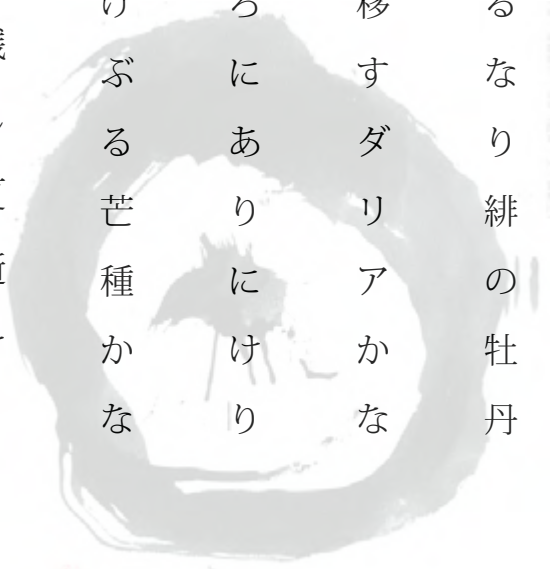
平成二十九年九月一日発行 第二十七巻第九号 通巻第三二五号 (毎月一回一日発行)  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

# 充電期間

高橋将夫

梅雨明けや軽くなりたる靴の音  
梅雨といふ充電期間明けにけり  
雲海に顔を出したる潜望鏡  
幕末のごとくに入道雲崩る

藻の花や真鯉ばかりの池に咲き  
雨足の見える明るさアマリリス  
仙人も立ち止まるなり緋の牡丹  
和室から洋間へ移すダリアかな  
原因は若葉のころにありにけり  
霊山のはるかにはげぶる芒種かな  
真つ直ぐな航跡残し夏逝けり



# 槐安集

水野恒彦

雨蛙幼き 我の孤影かな  
六月の海峡に立ち男老ゆ  
夢ばかり見てにんじんの花忘る  
キリストの血より咲きたる罌粟の花  
銀河系の闇を濡らして山椒魚

加藤みき

夏霧にかこまれてをる背筋なり  
につき水をこはごは飲んでをりにけり  
やはりこれ緑の渦の蚊取線香  
人工知能何するものぞ夏の月  
梅雨晴間薔薇色の空たまはりぬ

中島陽華

花惜しむなり烏骨鶏のカステラを  
近江児や削り氷にあまづらを  
天壇へ香駆けのぼる団扇撒き  
南無三や胡瓜刻んで酢につけて  
息吐いて吸うて蟾蜍と万福寺

竹内悦子

両の掌を器としたり山清水  
ほととぎす耳を澄ましてをりにけり  
切株に 霊芝 八十八夜かな  
天網や花酸漿の咲きてこそ  
枇杷の実に産毛ありけり夜の雨



雨村敏子

三百の睡蓮の空ありにけり  
あをば木菟産土に川見にゆかむ  
はらからのともに晩節初鯉  
かんざしはももいろ珊瑚青葉潮  
睡蓮に真昼の影のなかりけり

本多俊子

麦秋といふ一枚の色となる  
神木の色に紛れし青大将  
野あやめは指貫のいろ業平忌  
絶壁へ波立ち上がる鳶の恋  
ほほゑみの色をこの世にひめさゆり

近藤喜子

天空の丸さ見えたる虹の橋  
届かざりし草矢いまだにある手中  
葉にひそと雫をたたみ眠り草  
浮いて来い胸中いちど空(から)にして  
梅雨満月赤し不思議の起こりさう

瀬川公馨

明晰な夏鶯のこゑかしら  
小坊主の鉢割れ頭半夏生  
絵空事を並べたてたる球蔓  
腰紐で縛り上げたる栗の花  
女らの喋る広間や岩魚冷む

久保東海司

浮雲へ貫はれてゆくシヤボン玉  
青空へ花火は音をつぎこみぬ  
綿虫を宙に搏ちたる愚の極み  
鴻雄の岳はなればなれにしたたれり  
羽脱け鳥ぴかりと昼のいなびかり

柳川 晋

灰の中にダイヤモンドもある夜店  
箱眼鏡の奥に人工知能の眼  
この国が何処へ行かうと麦の秋  
地に足が着きて巢立となりにけり  
箱舟に螢は乗つてをらざりし

熊川暁子

樽咲くつつしみの色溢れさせ  
風鈴の共鳴圏で揺るるもの  
待ち人の来て噴水を離れけり  
菖蒲田の彩のとけ合ふかろき風  
ほうたるに愛想ぴかりといふがあり

寺田すず江

深爪のあと梅雨入りとなりにけり  
やすらぎの時はいくばく合歡の花  
水無月の花や白色ばかりなる  
恋を知る少女となりぬゆすらうめ  
木道を歩ほっか荷と風と太宰の忌

岩下芳子

岩月優美子

くちなはの首の長さを定義せよ

一門祝「蜷の道」を率ゐる男時蜷の道

華やかに湯引きの鱧の反りにけり

山腹の寺の屋根越す今年竹

奈良団扇ゆるりと送る山の風

近藤紀子

竹中一花

賜はりし誕生丹の青葉風

磐座や青葉山ごと吸うてをる

黒穂麦抜きに畦行く祖父との日

ちがやほほけ茅花流しを待つばかり

青葉木菟来鳴く夕べを待ちわびる

花椎の香や世の風に逆らはず

白百合の一花受胎告知かな

夕さりて考(ちち)現はるる白地着て

竹皮脱ぐ夢は聖人君子かな

神々の眠りを覚ます蟬時雨

夜を運ぶかなぶんの音灯の中に

早乙女の背をかすめたる鶴

スメタナの吾が祖国より夏の風

夏蝶のゆらりと蛇の上を飛ぶ

鶉の羽音池の波目を変へにけり

前田美恵子

一徹を貫く姿勢 夏蓬  
水郷の船に付きくる浮巢かな  
緑陰を占める豆棋士夢大き  
子子の空へ飛びたつ日の近し  
首傾げ何を語らむ鹿の子かな

中田禎子

阿武山の緑の中に玉枕  
新緑の古墳園児の笑ひ声  
かつこうや瀟洒な家の今は留守  
洗ひ髪のまま猫抱く影法師  
黒南風や槐の傘の中にをる





# 槐市集

久保夢女

幸せていいのかしらと青田風  
今年竹一本筋を通しけり  
猫語あり犬語もしかり夏始  
みくじ吉奈良の都のみどりかな  
神ほとけ詣でアイスクリームかな

後藤マツエ

耕すや影来て蚯蚓くはへ去る  
浮き雲のふち金色に夕焼ける  
更衣古き服着る息止めて  
いつかてふ日は訪れず夏となる  
人住まぬ屋敷の跡の草いきれ

阪倉孝子

聴き流すこと上手くなり心太  
復元の土器見つめをり半夏雨  
嬉し涙たつぷりためて四葩かな  
わたくしに物申す貌墓  
恋螢うなじにふれてときめきぬ

篠原京子

青空に雲ひとつ置く残暑かな  
新涼の花嫁迎ふ輪の中に  
漢字ひとつ調べてをれば虫の声  
赤蜻蛉昔の悪さごめんなさい  
爪を切る伸ばせし脚の冷やかさ



柴田靖子

瀧にゐてともに流せし思ひあり  
サルビアの憚ることなく思ひこめ  
夕やけに向かふ足どりゆるぎなし  
我も生き地球も生きし清水湧く  
薄衣美女も悪女も身にまとひ

庄司久美子

八咫鳥の黒きポストや鳳蝶  
青葉闇火縄銃ある天守閣  
吊橋を引き返す足風青し  
さやさやと朝日煌めき植田かな  
慈悲心鳥穴みつつある埴輪かな

杉原ツタ子

かつば沼の南部曲り家蛙かな  
青蔦や団旗七色背に飛翔  
向ひ合ふ金文字の鳩竹移す  
龍飛の風の日本猿夏の始  
薫風や倒木凜と青池に

高野昌代

湧き水や蜷の道にも木の芽風  
「宇治川」<sup>料理旅館</sup>の文庫の帯も新茶色  
植糸られて列の曲りしお田植祭  
きな臭き国会の答弁走り梅雨  
梅雨満月掠めし雲の一つ三つ

竹村淳

夏燕町内低空パトロール  
神官につづき奏上夏越受く  
ゆく雲や雪溪にさす影はやし  
子に送る彩りも添へ夏野菜  
朴の花山の賛歌を合唱す

田中信行

新緑に万葉の歌碑隠れをり  
ゴイサギの目の鋭さや夏の水  
独り酒北の鉄路の夏遠し  
夏の宵約束時間の時計台  
蝦夷梅雨や豊平川を叩く音

# 槐集

## 高橋将夫選

大夕焼母の棺の焰かな 大阪 江島 照美

蝙蝠や音で描きし世界観  
昼顔の見せぬままなり夜の顔  
汗の香を好む男の白昼夢  
からからと音の波打つ小判草  
天界の川にも掲げよ大花火  
ひと筋の道に標や雲の峰

藤田美耶子

青嵐仏にもある運命線  
かたまりて秘密を頷つ罌粟の花  
余生なほ花も実もあれさくらんぼ  
きぎと啼く小芥子の首の梅雨湿り

守口 三木 亭

塩味を知らぬ 一生蛞蝓  
舗道行く蚯蚓にコロンブスの遺志  
白鷺に色を信ぜぬ 一徹さ  
女郎蜘蛛幾何学修む黄の証

怨を消す力秘めたる女滝かな 大阪 有松 洋子

かろやかに罔象は唄ひ梅雨に入る  
死すときは光浴びんと蚯蚓出づ  
毒を持つものは優しげ君影草  
壊れては造る 一生蜘蛛も人も  
大夕焼つとめはたせし色となり 大阪 平野 多聞

蝉時雨 抜苦与楽の坩堝かな  
炎天を四角に畳み切手貼る  
こめかみに阿闍梨の加護の青葉風  
花は生き人は咲くべし桜桃忌  
青田吹く風を真如と申しまする 竹原 久保 夢女

己が身の応援旗なり青芭蕉  
天啓は未だ届かじはたた神  
星涼し知る術の無き結末も  
身一転ブーゲンビリアでありしかな

大夕焼 母の棺の焰かな 江島 照美  
あまりの大夕焼に、通常は見ることがない茶毘の火を想起したのであろう。

〈蝙蝠や音で描きし世界観〉の句、蝙蝠は超音波で周囲の状況を把握する。このエコーロケーションを蝙蝠の世界観と見たところがユニーク。

〈昼顔の見せぬままなり夜の顔と〈汗の香を好む男の白昼夢〉の句、エロスの世界ともいえよう。

〈からからと音の波打つ小判草〉は小判草に対して、「からから」のオノマトペがよく効いている。爽快。

天界の川にも揚げよ大花火 藤田美耶子  
天の川の川辺で揚げる花火。なんとも壮大な景。

〈青嵐仏にもある運命線〉の句は着眼が面白い。本当に運命線が刻まれている。仏も人なのだ。

〈かたまりて秘密を頒つ罌粟の花〉の句は罌粟の花の本質に迫る。〈ひと筋の道に標や雲の峰〉の句、一筋の道にも標は必要なのだ。

〈余生なほ花も実もあれさくらんぼ〉の句は「さくらんぼ」が無邪気。「花も実もあれ」の心意気に共感。

ききと啼く小芥子の首の梅雨湿り 三木 亨

小芥子の首を回す作者の姿が想像されてほほえましい。「ききと鳴く」のオノマトペが効いている。

〈塩味を知らぬ一生蛞蝓〉の句、蛞蝓に塩は月並みだが、「塩味を知らぬ一生」は作者ならではの措辞。

〈女郎蜘蛛幾何学修む黄の証〉の句、女郎蜘蛛の黄色の模様と幾何学的な蜘蛛の巣を結び付けたところが手柄。

〈舗道行く蚯蚓にコロンブスの遺志〉の句、舗道を渡る蚯蚓に対して、大航海時代のコロンブスを持ち出す発想に脱帽。

怨を消す力秘めたる女滝かな 有松 洋子

いかにもこの作者らしい感性と思う。でも、消したい怨恨があるようには見えないが。

〈死すときは光浴びんと蚯蚓出づ〉と〈毒をもつものは優しげ君影草〉の句、いずれにもこの作者ならではの視点がある。

〈壊れては造る一生蜘蛛も人も〉の句、これぞ作者の人生観。

炎天を四角に畳み切手貼る 平野 多聞  
暑い日に暑中見舞か何かを書いて、切手を貼った景。「炎天を四角に畳み」が上手い。

〈蟬時雨拔苦与楽の坩堝かな〉は、蟬時雨にマッチしている。「拔苦与楽」は「仏の多聞」ならではの措辞。

〈以下略〉